

## 「歌人は見た」佐佐木定綱

誰それが有名人に似ている、という話をするを「似てる」と「似てない」に分かれる。どうやら人の顔を認識するパターがひとりひとり違うらしい。

「短歌」十月号の特集は「写生がすべて」。その中で永田和宏の「読者論としての写生」が面白かった。「写生とは、対象のもつさまざまの属性の中の、ある一点だけを抽出し、あとはすべてを表現の外に追い出してしまふ、そういう暴力的な選択だと思ふのです。」とある。言葉で目の前のものをすべてを言い表すことなどできない。短歌という定型詩では選択の重要度は上がる。

「短歌研究」十一月号「新進気鋭の歌人たち」と「角川短歌」十一月号の角川短歌賞作品からいくつかピックアップしてみた。  
・夕焼けの浸水のなか立ち尽くすピアノにほそき三本の脚

鈴木加成太「革靴とスニーカー」  
今年の角川短歌賞受賞作より。弾かれることもなく、夕日の中にあるピアノ。巨大な体を支える細い脚ではどうすることもなく夕日に飲み込まれていく。抗いようのない感覚がある。

・野菜庫の底の塵みな拭きとりてなにゆゑか往き場うしなふわれは  
碧野みちる「鉢」

日々消費されていく野菜とは別に残っていく塵。長い時間を掛

けて溜まっていた塵を拭き取ったことにより、自分の中に溜まっていた長年の思いすらなくしてしまったのだろう。

・布袋に詰めれば鈍器となるほどの本携えて教授と会ひぬ

滝本賢太郎「恋ふるのは火」

本の内容ではなく、重さだけを見ている。知識や立場では教授に敵わないが、人を殴り殺せるぐらいの本を持っているのは自分である。せめて暴力の水平では優位に立とうとしている。

・禿げ、白髪、白髪、禿げ、禿げ 光りつつ役員会議に集うたましい  
ユキノ進「中本さん」

役員だなんだと言っても、端から見れば禿げと白髪の集まりである。子どもの視点のようなコミカルさがある。

・モヒカンの男が育てる朝顔が咲いたのを知る Twitter につ

川島由佳子「向かう」

Twitterを通じて自分の知らない異界とつながっている。

・食べかけのポテトチップス流されて海に着くならそれがいいかも  
加賀田真優子「びびび」

食べかけのポテトチップスを他の人は食わない。でも海に着けば魚が食う。食物連鎖の中に戻れてよかったと思っている。

なにを見ているのか考えるとき安部公房の言葉を思い出す。「阿波環状線の夢」の一節、夢についての記述だが、現実においてもそう変わらない。「まず、見なければいけない。そして、確実に見たかどうかを繰り返し自分に問い質してみよう、見たものと、見なかったものとを、厳正に選り分けて、見なかったものを捨て去ることに、ためらいを見せないことだ。捨てないさぎよさが、たぶん書くという行為に、必然性を取戻してくれるはずである。」  
自分がなにを見ているか、意識的になりたいと思う。